

相性の悪い子供とどうつきあうか（その1）

1 はじめに

人間は、話が合わない人とは自然に話をしなくなります。「嫌い」とまではいかなくても、互いにさらりとつきあっている関係は実際に存在します。教師と子供の関係もまた人間と人間の関係です。相性がいい場合もあれば悪い場合もあります。しかし、教育の場ではたとえ相性が悪くても、教師は子供と教師が互いに信頼し合う関係を育てていかなければ真の教育は成り立たないのです。

2 相性の悪い子供とは

新学期、学級担任は、子供に対して公平に接するとともに、いわゆる「いい関係」を築くように努力を重ねていきます。日常的な小さな問題を解決していく中で、互いに信頼し合っていくのです。

ところが、教師も子供も個性をもっているので、その両者がかみ合わない場合が出てきます。これが相性の悪い場合です。相性は教師の立場だけではなく、子供の立場で考えることも必要です。

そこで、図1のように学級の子どもたちを四つの関係でとらえてみました。

教師から見て

子供から見て

相性が悪い		悪い
相性が悪い	相性が悪くない	悪い
A開放された関係 〔教師と子供が信頼し合う関係〕	B隠した関係 〔子供は教師と相性が悪くないと思っているが、教師はそう思っていない関係〕	
C気が付かない関係 〔教師は子供と相性が悪くないと思っているが、子供はそう思っていない関係〕	D気まずい関係 〔教師と子供が互いに相性が悪いと思っている関係〕	

図1 教師と子供の相性のよしあしの関係

●A関係（開放された関係）……教師と子供が信頼し合う関係。

●B関係（隠した関係）………子供は子供は教師と相性が悪くないと思っているが、教師はそう思っていない関係。教師は子供にそのことを悟られないように隠して

いる関係。

●C関係（気が付かない関係）…教師は子供と相性が悪くないと思っているが、子供はそう思っていない関係。

●D関係（気まずい関係）………教師と子供が互いに相性が悪いと思っている関係。

相性の悪い子供とは、B関係、C関係、D関係にある子供であると考えました。

それでは、教師はそれぞれの関係にある子供たちとどうつきあつたらよいのでしょうか。私が過去に担当した子供たちとの関係をどう改善していったかをまとめてみました。

3 B関係の改善のために

この関係は、教師が気を付ければすぐ改善されます。

1年生のA夫は、時々「きのう、しんかんせんにのってあそびに行きました…」とハガキに書いて送ってきます。長期休業中なら分かるが、学校で毎日会っているのに返事を書かねばなりません。しかし、わざわざハガキに絵をかいたり字を丁寧に書いたりしている子供の姿を思い浮かべると、教師も丁寧に扱わざるをえません。子供がもらって嬉しい手紙を工夫しました。

「いつも会っているのだから、話をすれば分かるよ。」などとは決して言えません。もしかしたらふれあいが少ないのかもしれないと思いました。子供の教師への親近感を大切にしなければなりません。

3年生のB男は、一度決めたことは教師が「やめなさい。」と言っても最後までやり通す子です。教室の縦の長さを測るのに15cmの定規をつなぎ合わせました。しかし、約束の時間になんてできません。そこで「ここまで分かったのだから、印を付けてあげよう。」と言ったらやめたのです。その後、活動時間を与えると、喜んで続きをやり、ほとんど正確に長さを求めたのです。その大変だった経験から、巻き尺のよさを味わったのです。もし、「時間だ

から終わり。」としただけなら、それまでのB男の苦労を否定してしまうところでした。相性が悪いと思っている子供は、教師にない面をもっている子供であると考えたいものです。

5年生のC雄は、おとなしい子です。一見何を考えているかわかりません。教師ともほとんど会話をしません。ところが、作文を書かせたり、親から話を聞いたりすると、かなり教師のことを信頼していることが分かりました。私はC雄が絵や工作がうまいことを知り、意図的に声をかけてみました。教室や廊下などで一対一になったとき、C雄が得意なことについて思いついたことを話しかけるのです。「夏休みにどんな工作をやるか決まった?」「もうすぐ写生会だね。晴れるといいね。」こうして彼自身の存在感を味わわせていました。「私はC雄と相性が悪い。」と感じていることをC雄に悟られてしまったら、教師は折角の信頼感を失うことになったのです。B関係の子供には、プラス思考で積極的に声をかけることが大切です。

4 C関係の改善のために

教師から見ると相性が悪くないのに、子供から見ると相性が悪いという関係は、教師の児童理解の不十分さが原因です。子供の表情を読み取り、心を知るようにしなくてはなりません。

①遊びを通して

子供たちは、教師に遊んでもらうと大喜びです。そのうち、教師と対等の関係になって遊んでいきます。リラックスして無邪気に振る舞い、本音を出していきます。いじめや差別につながるような言動をしてしまうこともあります。教師は、子供たちと一緒に遊ぶことを通して「子供から見て相性が悪い。」という関係を改善していく方策は、大変有効です。

②授業を通して

3年生の算数で、「 3×10 をどう計算するか。」を考えさせました。

子供たちはよく考え、「 $3 \times 9 + 3 = 30$ 」「 $10 \times 3 = 30$ 」などたくさん考えを出しました。「もう他にはないかな?」というと、ある子が「 $6 \times 5 = 30$ でできます。」と言ったのです。他の子はげげんそうな顔でその子を見ました。こんな時、教師が「そ

れではできないね。」と言ったのでは、子供が傷つくだけです。ところが、「どうしてそうやったの。」と尋ねてみても、その子は何て説明したらいいか分からなかった。「みんなはどう思う?」と言うと、「30って答えが分かっていたからできたんだよ。」「九九表を見たんだよ。」その子がうなずきました。子供が誤答や一見よく分からぬい答案を出した時、少しでもいいからよいところを見つけてやることが大切です。図で考えると(図2)、 6×5 でもできるのですよ。」と補足してやります。

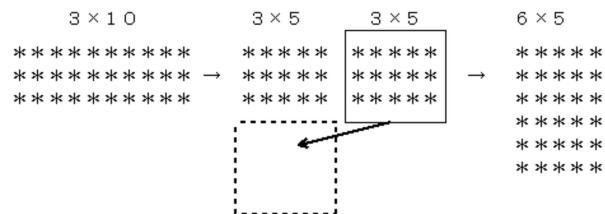


図2 子供の人格を否定しない

「へえー、そうなのか。」とみんなが驚きました。こうして、その子はニッコリとしたのです。子供から見て相性が悪くなるのは、子供が教師に否定されたことによることが多いのではないでしょうか。

③日記を通して

高学年では、子供も教師も委員会活動、クラブ活動や集会活動の準備などで休み時間まで忙しくなります。ゆっくり話す時間がなくなってきます。その上、子供は心が揺れ動く年頃でもあります。

そこで、1日の生活を振り返って日記を書くようにしました。「今日は、サッカーのPKで時間を引きのばされたのがイヤだった。時間を守ってほしい。」こんな日記を目にすると、子供の意外な面に気付きます。「みんなで話し合って決めたのだからがまんしなさい。」と対応しただけでは、子供の心を閉じさせてしまいます。教師が「何でもよいから書きなさい。」と言っているのに矛盾します。「先生は勝負に夢中になって気が付かなかった。あなたのように時間にまで気を付ける人になるようがんばります。」と返事を書きました。子供たちのその場その時の気持ちを受容しつつ、教師が変わらなければなりません。